

歴史と永遠のあいだ  
—カトリック長崎司教・山口愛次郎の決断と祈り—

宮崎 広和

ノースウェスタン大学人類学科

広島大学平和センター客員研究員

広島大学大学院人間社会科学研究科特任教授

**Between History and Eternity:  
Bishop of Nagasaki Yamaguchi Aijiro's Decisions and Prayers**

Hirokazu MIYAZAKI

Department of Anthropology, Northwestern University

Affiliated Researcher, The Center for Peace, Hiroshima University

Professor (Special Appointment), Graduate School of Humanities and Social Science, Hiroshima University

**Abstract**

In 1958 Bishop Yamaguchi Aijiro of Nagasaki made the controversial decision to remove the ruins of the old Urakami Cathedral destroyed by the atomic bombing of August 9, 1945. The bishop insisted on having a new cathedral built on the same site, a highly historically significant site where Christians had been repeatedly forced to renounce their faith and had been persecuted from the seventeenth century until the end of the nineteenth century. The bishop's decision went against the popular wish of the citizens of Nagasaki to preserve the ruins as a symbol of peace. In this article, I revisit Bishop Yamaguchi's decision by contextualizing it in a series of complex decisions the bishop made during and following the Asia-Pacific War. In particular, I consider the bishop's international connections and relationships as context for these decisions, as well as the bishop's practice of prayer that routinely

accompanied the decisions. The goal is not to speculate on political or religious motivations behind these decisions, but to illuminate the tension between history and eternity embedded in the bishop's decisions.

## 1. 司教の決断——浦上天主堂廃墟保存問題——

1945年8月9日の原爆で破壊された長崎の浦上天主堂の廃墟の撤去は1958年3月に始まり、1959年10月には同地に新しい天主堂が完成した。広島では1960年代に「原爆ドーム」（旧広島県産業奨励館）の保存をめぐる市民運動が広がり、1966年に広島市議会が保存を決定。広く国民からの寄付によって保存のための工事が施された（根本 2018, 74-77）。これに対して長崎では1950年代に市議会や市民から旧浦上天主堂の廃墟を保存するよう強い要請があったにも関わらず、浦上天主堂の被爆遺構は取り壊されてしまったのである。この決断をしたのはカトリック長崎司教、山口愛次郎であった。山口の決断に対する落胆と不満は現在でも市民の間に残る。山口はなぜこのような決断をしたのだろうか。

旧浦上天主堂の廃墟をめぐる市民の間で議論が沸き起こったのは1951年秋だった<sup>1</sup>。戦前東アジア最大規模の教会と言われた浦上天主堂と、やはり原爆で半壊した長崎市街地の西中町教会（後の中町教会）の再建は、浦上出身で、かつ戦前一時西中町教会の主任司祭を務めた山口にとって戦後の長崎教区復興の要の事業であった。中町教会については、1950年8月に、残っていた外壁を補強して再利用する形で再建が始まり、1951年10月までに新聖堂が完成。10月17日に山口の司式で献堂式が行われている<sup>2</sup>。中町教会新聖堂完成を前に浦上天主堂再建の話題が持ち上がり市民を巻き込んだ議論になったのである。

ところで終戦後浦上天主堂の廃墟では1946年11月までに仮聖堂が建設され12月1日に山口のローマ留学時代の学友でシドニー大司教であったギルロイ枢機卿によって祝別された（浦上小教区 1983, 115）。1949年に組織された聖フランシスコ・ザビエル上陸400周年記念行事、いわゆるザビエル祭は、ザビエルの「聖腕」、そして教皇特使として再びギルロイ枢機卿を長崎に迎えることになり、「国際文化都市」長崎を世界に喧伝する格好の機会として市をあげての一大行事となった（平山 1949）。ザビエル祭を前に旧天主堂の廃墟周辺は整備され天主堂正面の壁と右側壁だけが残された（浦上小教区 1983, 130-131）。5月29日ギルロイ枢機卿や山口らが捧げた荘厳ミサではその側壁に祭壇が設置された<sup>3</sup>。

しかし、長崎を国際文化都市として整備する事業の一環に位置付けられた旧浦上天主堂廃墟について

<sup>1</sup> 「撤去か保存か——浦上天主堂遺壁に兩論」、『カトリック教報』、1951年9月1日。

<sup>2</sup> 「厳かな献堂式——教区司祭團参列」、『カトリック教報』、1951年11月1日。中町教会の再建については、山口の仲介で、中華人民共和国の成立で中国から追放され日本へ移ったカナダのスカボロ外国宣教会のジョン・フレーザーが資金を援助した（中町カトリック教会 1986, 77）。1952年1月、ヴィクター・デルノア元長崎軍攻司令官にあてた手紙の中で、山口は、中町教会の再建が終わり、自身にとっての「最大の問題」は浦上天主堂の再建であると述べている。Letter from Paul Yamaguchi to Victor Delnore, January 14, 1952, Gordon W. Prange Papers, Series 2, Item VD-025, Gordon W. Prange Collection, University of Maryland Libraries.

<sup>3</sup> 「天主堂廃きよの壁に大祭壇——浦上の荘厳野外ミサ」、『カトリック教報』、1949年6月15日。

て、1951年山口は原爆の悲惨な記憶を思い起こさせるだけで「一切合さい過去の残存物を忘れて平和をねがうとき、思い出の惨害は取りはらったがよかろうという意見の台頭で、つまり平和は観光にかえられぬということである」と述べている<sup>4</sup>。

後述するように山口は1943年8月からインドネシアのフローレス島へ「宗教宣撫」のために派遣されており、自身は原爆を体験しておらず、1946年1月まで長崎に帰らなかった。原爆で山口は実母と弟家族を失ったが、特に実母は浦上天主堂内で犠牲となっている。

浦上天主堂の廃墟の撤去を積極的に進めた山口の姿勢の裏には、肉親を失った悲しみと共に、浦上出身の司教として浦上キリシタンの歴史への思い入れがあったことも確実である。というのもそもそも浦上天主堂は、「絵踏み」が行われた庄屋の高谷家の屋敷を買い取った浦上の信徒たちが「[絵踏みという神への] 冒瀆のつぐのいとして」その土地に建てたからだ（浦上小教区 1983, 79）。天主堂は1895年に着工。1914年に当初の設計にあった中央ドームを除いて完成。1925年には天主堂正面に双塔が加えられ天主堂はようやく完成となった。浦上の信徒が心血を注いで建てた天主堂だった（浦上小教区 1983, 80-85）。だからこそ新天主堂再建のための代替地を市から提案された時には、浦上天主堂が建っていた土地は浦上のカトリック信徒にとって「血と涙の由緒ある聖地であり、また、信徒たちの居住区域の中心地にあるので、その中心的存在としての意義があると共に、何事においても集合するに便利であり、交換するなどとはとんでもない」（中島 1990, 218）と山口は考えたようだ。

浦上の信徒にとって天主堂の再建は悲願であったが、再建計画は1953年に浦上小教区内での具体的な協議が開始され、1954年には再建委員会が組織される<sup>5</sup>。そして後述するように1955年から1956年にかけて山口は自ら再建資金調達のためにアメリカとカナダを訪問して募金活動を行なった。

1949年に設置された長崎市の原爆資料保存委員会は、旧浦上天主堂廃墟の保存について、カトリック長崎教区および山口司教に対して、1958年までに少なくとも9回にわたり繰り返し協力を要請している<sup>6</sup>。さらに1958年2月18日には長崎市議会で「旧浦上天主堂の原爆資料保存に関する決議案」が可決され、その提案者である岩口夏夫議員は浦上天主堂の遺構を「長崎の二十世紀のシンボルとして——十字架として残す」意義を訴えている<sup>7</sup>。

しかし、1958年3月、山口は新天主堂の着工を急ぐ<sup>8</sup>。山口に近かった教区司祭の中島政利は「世論に流されていては、着工の時期を失ってしまうおそれを感じられた大司教さまは、取り急ぎ、先の鉄川与助氏に旧聖堂の模型を作らせ、浦上教会顧問会にそれを提示して、かつての偉容を想起させて郷愁をそそり、賛意を取りつけると同時に、即座に旧聖堂に添った設計と、遺跡の撤去と整地を急がせて、着

<sup>4</sup> 「浦上天主堂存廢是か非か——各界代表はこう答う」、『長崎日日新聞』、1951年9月1日。また、山口は、教会が撤去を開始した1958年には「原爆の廃墟 [ママ] は平和のためというより、無残な過去の思い出につながり過ぎる。憎悪をかきたてるだけのああいふ建物は一日も早く取りこわした方がいい」とも語っている（「消える爪あと——浦上天主堂撤去の真相」、『週刊新潮』、1958年5月19日号、29）。

<sup>5</sup> 「浦上天主堂再建——信者たちの間に熱意わく」、『カトリック教報』、1953年4月1日、「新聖堂再建委員会機構成る」、『あれの』（浦上カトリック教会）、18号（1954年10月3日）、18。

<sup>6</sup> 江指天地之介（原爆資料保存委員会）の発言、1958年2月17日、『昭和33年2月長崎市議会会議録（第2回・臨時会）』、長崎市議会、13-14。

<sup>7</sup> 岩口夏夫の発言、1958年2月17日、『昭和33年2月長崎市議会会議録（第2回・臨時会）』、長崎市議会、19。決議案は、岩口夏夫の発言、1958年2月18日、『昭和33年2月長崎市議会会議録（第2回臨時会）』、40を参照。

<sup>8</sup> 「浦上天主堂再建に着手——原爆遺壁は取り壊す」、『カトリック教報』、1958年3月1日。

工に踏み切られた」(中島 1990, 218)と当時の山口の「決断」の背景を説明している。

もっとも長崎教区の司祭の間にも、浦上の信徒の間にも廃墟の取り壊しに関して複雑な思いを持っていた者は少なからずいたはずである。1951年9月1日の『長崎日日新聞』には浦上天主堂の主任司祭であった中島万利、そして信徒の一人として深堀市郎の声が紹介されている。中島は「保存の是非には触れたくない」と述べ、また、深堀は「かつて世界にも響いたこの天主堂の残った一部分でも子孫に見せて立派だったことを教えてやりたい」と述べている。しかし両者とも「教区側」、すなわち司教である山口の意向に従うと付け加えている<sup>9</sup>。

山口の決断への違和感や批判は現在も教会の内外に燦る。とりわけ2009年に出版されたジャーナリストの高瀬毅の『ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」』(高瀬 2013)は長崎で広く読まれている本である。ここで高瀬は山口の「決断」の真相について、当時を知る長崎教区の司祭など関係者の証言に依拠して、その「決断」の背景にアメリカからの圧力があったのではないかと推測する(高瀬 2013: 180-181)<sup>10</sup>。事実、山口は司教として初めてのローマ訪問の帰途、1950年12月から翌年2月にかけてアメリカとカナダを訪れている。1951年秋に山口は「アメリカ人が原爆被災地を訪れ、決して誇らかなものとは思わぬだろう、つまりイヤな記念物として映じるものと思われる」とも語っている<sup>11</sup>。また高瀬は、1955年から1956年にかけて新天主堂建設資金を集めるためにアメリカとカナダを再訪した際に長崎市との姉妹都市提携を決議したミネソタ州セントポール市などで山口が旧浦上天主堂の廃墟の撤去の話をしていることに注目している(高瀬 2013, 168-169)。ただ、高瀬はアメリカからの圧力についてその決定的な証拠を提示できていない。

さらに高瀬は被爆地の司教としての山口の誠実さ自体を疑問視している。1955年から1956年にかけての訪米中に滞在先から教区の機関紙に寄せた報告文の一つで山口は、かつての敵国であるアメリカの戦没者記念堂でのミサで日本の司教である自分が歓迎されたことに「ふっと胸が熱くなった」と述べ、また、同時に「旅行の初めから原爆犠牲者の霊魂たちの弔いの旅として知る人、知らない人、総ての犠牲者のため、特に祈って旅をつづけている」と述べている<sup>12</sup>。この感想について高瀬は「山口司教の心中にある原爆犠牲者への想いと、原爆を投下した米国での歓待を喜ぶ気持ちは、どう結びあい、折りあっているのかわからなかった。山口司教の文章を読む限り、そこには被爆地の人間として、司祭としての葛藤の跡を見出すことができないのだ」(高瀬 2013, 167)と強い疑問を提示している。

このように市や市議会から保存を強く要求され、また教区司祭や信徒の間にも保存を求める声がある中で、山口はどうして廃墟取り壊しの決断をしたのだろうか。中島政利が示唆するように、浦上の信徒にとっての「聖地」に建てられた天主堂を再び同じ土地の上に建てなければならないという強い意志が浦上のキリシタンの血を引く山口にあり、その意志が山口を取り壊しへと駆り立てたのだろうか。あるいは高瀬が示唆するように1950年代に2回にわたって訪問したアメリカで何らかの圧力を経験しそれが山口の「決断」の後押しをしたのだろうか。

一方、文学研究の横手一彦は高瀬の議論などを紹介しつつ資料によって旧浦上天主堂廃墟保存問題の

<sup>9</sup> 「浦上天主堂存廢是か非か——各界代表はこう答う」、『長崎日日新聞』、1951年9月1日。

<sup>10</sup> 「消える爪あと——浦上天主堂撤去の真相」、『週刊新潮』、1958年5月19日号、26-31も参照。

<sup>11</sup> 「浦上天主堂存廢是か非か——各界代表はこう答う」。

<sup>12</sup> 山口愛次郎、「燃えたつ布教心と死者のための熱禱」、『カトリック教報』、1956年1月1日。

詳しい背景を再構築することは難しいとした上で、資料に残されなかった様々な人々の気持ち、とりわけ「被爆後の浦上に生きる苦悩や葛藤」（横手 2010, 86）を、文学的想像力を働かせて勘案する可能性を示唆している。「記録に残る事柄のみに還元することは出来ない過去の現実を、多様な生の絡み合いとしてとどろ直そうとするならば、私たちは・・・文学作品の虚構性を補助線のようにして、事実と並置してみることも必要なのではないか」（横手 2010, 88）と問題提起している。これは山口の「決断」の動機を明確に示す資料をひたすら探し続けるよりも、別の形の想像力を働かせることの重要性を指摘するものである。

この論文では、山口の「決断」について新たな想像力を働かせるために、旧浦上天主堂廃墟に関する山口の「決断」を、戦中、そして戦後の復興期において司祭として、そして司教として山口が直面した様々な問題とそれらの問題に関して下した山口の一連の決断という文脈の中に位置付けてみたい。この文脈で明らかになることは、第一に、戦中・戦後を通じて山口は一貫してカトリックの信仰に基づいた国際的関係性の中で行動したということである。そして第二に、司教としての山口の決断は常に司祭としての日々の神への祈りの実践を伴うものでもあったということである。すなわち、山口の決断は、文化的・社会的な特殊性と国境を超えた信仰の「普遍性」、さらには「世俗なるもの」と「永遠なるもの」の対立と無関係ではなかった。カトリックの信仰に内包される国境を越える「普遍的な」もの、そして時間を越える「永遠なるもの」が、「司牧者」たる司祭として、そして司教として「歴史」の中で活動した山口の決断においてどのような役割を果たしたのだろうか。

## 2. 愛国と信仰——カトリック教会の「戦争協力」——

1937年から1968年まで長崎司教（1937年－1959年）、大司教（1959年－1968年）を務めた山口愛次郎は、1894年に浦上キリシタンの家族に生まれた。父山口愛吉は江戸時代の終わりから明治時代の初めにおきたキリシタン弾圧、いわゆる「浦上四番崩れ」で500名あまりの信徒とともに金沢へ流配され、欧米各国の抗議を受けて明治政府によるキリシタン禁制が終わる1874年まで長崎に戻らなかった<sup>13</sup>。山口愛次郎は小学校を卒業後、長崎神学校で学び、1919年にローマのヴァチカン布教聖庁が運営するウルバノ大学へ留学している。後年（1964年）山口はラジオ番組でローマ留学時代を回顧して次のように語っている。

各国の生徒の集まりだというコスモポリタンの印象ですね。まあ同じ信仰であり同じ目的であるという、いわゆる人種は違いますけれども同趣味と言いますかね。共同の目的を持っているということで、隔なく話せたということですね。・・・何ら・・・異郷人という感じが無いんですね。もとよりカトリックの精神がそうですからね。人種を超越した・・・超越したと言いますか、みんなごっちゃになった、人種、国籍の差別のない、隔のない間柄。また共同生活でもそういう感じ・・・

<sup>13</sup> 浦上キリシタンの流配の経緯については浦上小教区（1983, 40-68）を参照。また山口愛吉については「山口愛吉氏——司教嚴父」、『カトリック教報』、1940年1月15日を参照。

実際にね、議論でなくて、実際だったということですね<sup>14</sup>。

ローマで共通のカトリックの信仰に根ざしたコスモポリタニズム、すなわち山口の言う「カトリックの精神」の実体験はその後の山口に大きな影響を与える。とりわけ、後述するように、この留学期間中に会った世界各地の司祭たちとの具体的な関係は、戦中・戦後の長崎司教としての山口の実践的な糧となる。

山口は1923年12月24日にローマで司祭に叙階。1924年に帰国すると五島へ派遣され、上五島の鯛ノ浦教会の主任司祭となる。そしてその2年後長崎に戻り母校の長崎神学校の教授に就任した。

日本が中国での軍事工作へと突き進んでいった1931年、山口は長崎駅近くの西中町教会（現在の中町教会）の主任司祭となる。しかし、西中町教会主任司祭時代の山口を最も悩ませたのは、アジアにおける軍事的緊張や国内の軍国主義的雰囲気の高まりではなく、西中町周辺住民との関係だったようだ。というのも赴任直後に教会で出火。この火事で山口や他の教区司祭が寝泊まりしていた司祭館など教会施設の一部を焼失した。そして火事が周辺にも延焼。周辺住民から非難を受け、山口も責任を感じて地域住民への対応に苦慮した。火事の原因が放火とわかり教会に落ち度がなかったことがわかったのは2年後のことだった（中町カトリック教会 1986, 58、中島 1990, 125-126）。

山口が西中町教会周辺の住民との関係に気を揉んでいる間に、カトリック教会に対する風当たりは厳しくなり、教会は様々な方向転換を余儀なくされる状況に追い込まれていく。1932年5月には東京の上智大学でカトリックの学生が大学付きの将校に引率されて参拝した靖国神社で敬礼を拒否したことが問題化。それまでカトリック教会は信徒に対して神社参拝しないよう指示していたが、この事件をきっかけにその方針を見直すことになる。東京大司教のシャンボンとは文部省と交渉。神社参拝は愛国心の表現であるという言質をとり、教会は信徒の神社参拝を容認する方向へ舵をきる（三好 2021, 110-113）。これを受けてカトリック教会の機関紙『カトリック新聞』を担当していた長崎教区出津教会出身で後に大阪司教、枢機卿となる田口芳五郎は『カトリック的國家観』（田口 1932）を刊行。この出版物で田口はカトリック信徒が神社参拝することは宗教行為でないと断言する（田口 1932, 127-136）。さらに1933年末に教皇使節として東京に着任したパオロ・マレラは、カトリック信徒による神社参拝についてカトリック教会をそれぞれの地域の文化に適用させるヴァチカンの全世界的な方針と合致するものと位置付け、それを受けてヴァチカンの布教聖省は1936年に日本における神社問題に関する指針を発表しカトリック信徒の神社参拝を正式に容認する（三好 2021, 113-115）。このようにカトリック教会は日本の帝国主義的拡張の流れの中で、その立ち位置を、カトリック教会の近現代史を研究する三好千春が指摘するように「アクロバティック的に」（三好 2021, 123）変化させ、前のめりに戦時体制へと巻き込まれていく（高木 1985、カトリック中央協議会福音宣教研究室 1999、西山 2000も参照）。

当時の長崎司教は仙台出身で1927年に日本人として最初に司教に叙階された早坂久之助であった。1935年の時点で日本には12の「教区」があり、東京大司教区の他、4つの司教区（函館、大阪、福岡、

<sup>14</sup>「日曜訪問 我が母校 大浦天主堂 山口愛次郎大司教」、聞き手 矢ヶ部アナウサー、1964年4月11日放送、NBC長崎放送、NBC音声ライブラリー、長崎大司教区提供。山口の経歴については「山口司教略歴」、『カトリック教報』、1973年10月1日を参照。

長崎)がおかれ、他の地域は使徒座代理区(札幌、広島)や使徒座知牧区(新潟、名古屋、四国、宮崎、鹿児島)としてドミニコ会(四国)、フランシスコ会(札幌、鹿児島)、イエズス会(広島)、サレジオ修道会(宮崎)、神言会(新潟、名古屋)などそれぞれ外国宣教師に委嘱されていた。1935年にはマレラ教皇使節と当時唯一の日本人司教であった早坂長崎司教を含む12人の司教、教区長、教区管理者連名の文書「全日本教区長共同教書」を発表。この文書はそれまでの外国人宣教師たちの貢献を称えた上で、日本人司祭・司教の養成の重要性に触れ、教区の「邦人化」の準備を促している(カトリック中央協議会福音宣教研究室 1999, 67-68, 116-124, 三好 2015, 60-61)。これ以降「教区長」を外国人司祭から日本人司祭に置き換える動きが活性化する。カトリック教会は当時多数を占めていた外国人宣教師を順次移動させ、教区の「日本化」を進めていく。

こうした流れの中で、1936年山口愛次郎は鹿児島教区長(使徒座知牧)に任命される。それまで鹿児島教区はカナダのフランシスコ会宣教師たちに委託されていたが、1920年代以降国防上の要塞が置かれた鹿児島の奄美大島ではカトリック学校であった大島高等女子学校への激しい排撃運動が起こる。1932年の満州事変以降はこの運動はさらに激化。教区を管理していたサンフランシスコ会の宣教師たちは厳しい状況に置かれていた。結局1934年に大島高等女子学校は廃校となり、フランシスコ会は島から撤退する。1936年、フランシスコ会は鹿児島教区から撤退。山口が鹿児島教区長となったのである(宮下 1999, 三好 2015, 58-61)。

ところが1937年になると早坂が病気を理由に突然辞任<sup>15</sup>。長崎教区出身で1928年から長崎神学校の校長を務めていた浦川和三郎が臨時教区長に任命される。9月15日には山口が司教に任命され、11月7日に司教に叙階された。山口は当時多くの司祭を輩出していた日本最大の教区である長崎教区出身の最初の司教となった。1937年7月7日の盧溝橋事件により日中戦争が激化しており、長崎教区からも神学生を含む多くの若者が徴兵された。1937年8月1日の『カトリック教報』には「帝國政府の聲明」として中国における開戦の知らせとともに、シャンボン東京大司教による「訓示」として「我等カトリック信者としては素より忠良なる臣民たらざれば善良なる教徒たり得ざる旨」伝えられた<sup>16</sup>。この時期の『カトリック教報』には教会が実施した様々な愛国的活動、「銃後の支援」の数々が紹介されている<sup>17</sup>。負傷者病人輸送用の小型飛行機「愛国第二百七十七カトリック號」が信徒たちの寄付で製造され陸軍に寄贈され、教会では「武運長久祈願」が行われた<sup>18</sup>。臨時教区長の浦川は、山口の司教任命に際して次のような文章を寄せている。「時は正に非常時、否非常時中の非常時です、此時に當って、斯かる大人格、大徳望、大識見の司教様を與へられた我長崎教區は實に幸福の至りと謂はなければならぬ」<sup>19</sup>。

まさに「非常時中の非常時」に司教となった山口は、1938年1月司教として初めてとなる「年頭の辭」で、日常生活と信仰生活の一致、そして愛国の精神とカトリックの信仰の一致を訴え、戦時体制化「荊棘の道」を歩くことを促す<sup>20</sup>。また、1938年10月15日の『カトリック教報』には山口による「武運

<sup>15</sup> 早坂司教の辞任の複雑な経緯について妙摩(2021, 190-191)を参照。

<sup>16</sup> シャンボン、「訓示」、『カトリック教報』、1937年8月1日。

<sup>17</sup> 例えば、『カトリック教報』、1937年8月15日を参照。

<sup>18</sup> 『カトリック教報』、1937年6月1日。

<sup>19</sup> 浦川和三郎、「山口新長崎司教様を迎へて」、『カトリック教報』、1937年10月1日。

<sup>20</sup> 山口愛次郎、「年頭の辭」、『カトリック教報』、1938年1月1日。

長久祈願」及び「戦歿将兵慰霊祭」における講演の「速記録」が掲載されている。そこでも山口は「忠君愛國、君に忠をなし、國を愛するの精神は我が國民道德常識」であり、それは「信仰的常識」と一致すると論じている。さらに戦没者をキリストの十字架上の犠牲にもたとえ、彼らの平安を祈り、改めて「銃後の務め」の重要性を語る<sup>21</sup>。さらに1939年の「年頭の辭」で山口司教は既に20名以上の教区信徒が犠牲になっていることに触れた上で、日中戦争の大義としてアジアにおける「相互扶助」と反共の精神に基づいた新秩序の確立をあげ、この目的がカトリック教会の教えと合致し、日中戦争は「聖戦」であると主張している<sup>22</sup>。

もっともこれらの発言は官憲の眼を意識しての発言であろうし、山口司教が「愛國」と国境を越えるカトリックの「信仰」の関係について実際にどう考えていたのか、そして長崎教区の司祭、修道士、信徒たちがどれほど積極的に愛国的活動に参加したのかどうか、教会の機関紙などの記事からは測り知ることにはできない。政府の圧力もあって進んだカトリック教会の「日本化」あるいは「邦人化」は、意図は別としても表層的には当時のヴァチカンの方針と一致するものであり、また「反共」の立場も無神論に立つ共産主義を脅威と位置付けるヴァチカンの方針と合致する（三好 2021, 117-140）。いずれにせよ山口は「愛國」と国境を越えて共有される「信仰」の緊張関係、そしてその交差の可能性を意識しつつ教区の舵取りをしたことは確かである。

ただ、カトリック教会の「日本化」の流れの中で、1920年代までパリ外国宣教会の宣教師に任されていた長崎司教区はとりわけ保守的とみなされ、1933年に着任した教皇使節のパウロ・マレラはヴァチカンに提出した文書でその保守性を「長崎の精神」と名付けた（三好 2020, 130）。この文脈で考えると、長年フランスの宣教師の指導を受けてきた長崎の司祭たちの間に、そしてまた信徒の間に神社参拝などに関する教会の方針の突然の変更への戸惑いはあったであろう。こういう点でも長崎教区において「愛國」と「信仰」の関係について様々な意見が存在していたとして不思議ではない。

例えば、1940年山口が皇紀2600年記念事業として文部省の認可を得て設立した東陵中学校という7年制の学校で、1941年に騒動が起きている<sup>23</sup>。学校創立に当たって、後に潜伏キリシタン研究で知られ南山大学教授となる田北耕也が校長に招聘された<sup>24</sup>。1941年11月の特別高等警察の『特高月報』によれば、学校の教育方針をめぐる田北と教員で教区司祭の大窄政吉（後に長崎公教神学校校長）や創立者の山口の間に確執が生じる。特別高等警察の理解では田北が「基督教主義教育」から「日本の教育」への針路変更を試みたところ、山口らの抵抗にあい、まず大窄が更迭され、さらに1941年10月に田北の辞職へと発展した<sup>25</sup>。しかし、田北自身が「自ら創立に尽力した長崎教区の私立東陵中学校長の席を、昭和十六年の秋に、軍人のサーベルで追われた」（田北 1968, 40）と回顧していることを考えると、事

<sup>21</sup> 「銃後後援 強化週間に當りて 武運長久祈願並びに戦歿将兵慰霊祭に於ける山口司教講演速記」、『カトリック教報』、1938年10月15日。

<sup>22</sup> 山口愛次郎、「年頭の辭」、『カトリック教報』、1939年1月1日。

<sup>23</sup> 東陵学園設立の経緯については中島（1990, 136-137）を参照。

<sup>24</sup> 教区の神学校を7年制学校に再編し「日本の學制と合流すること」を提案したのは田北自身のように（田北耕也、「自主と追隨——教區に對する一提案」、『カトリック教報』、1939年6月1日）。田北はもともとカトリックではなかったが、プロテスタントや仏教など様々な宗教体験を経て、1937年に長崎に移りコルベ神父が設立した聖母の騎士会修道院と関わりを持つようになり、雑誌『聖母の騎士』の創刊に携わった。そして1938年6月に山口司教から洗礼を受けている（田北耕也、「カトリック教の理解」、『カトリック教報』、1938年6月15日）。

<sup>25</sup> 『特高月報』、1941年11月号、22-23



情はさらに複雑であったのであろう<sup>26</sup>。

「愛国」と「信仰」の関係の揺れ、そして混乱は教会全体の問題でもあった。軍国主義体制の中でカトリック教会は神社参拝など国家権力が強制する愛国的活動を受け入れ、アジア地域における日本の帝国主義的拡張をアジアに新しい「秩序」を確立するための「聖戦」として受け入れた。さらに1940年に宗教団体法が成立すると、「日本天主教」を組織、ヴァチカンから独立した宗教団体として登録。東京大司教の土井辰雄がその代表となった（三好 2015, 66-67）。しかし、その一方でカトリック教会は国家を超え、国境を超えた共通の信仰に根ざした教会であり続けたことも事実である。三好が指摘するように、「独立」以後も教皇使節パウロ・マレラは日本の司教団と密接な連携関係を維持した（三好 2015, 68-69）。

「愛国」と「信仰」の複雑な緊張関係の中で、1930年代から1940年代にかけて、長崎教区では国際的な信仰の共有に基づく様々な国際親善活動が愛国主義的活動と連動しながら組織された。山口をはじめとするカトリック教会関係者は積極的にこうした国際的な事業を組織してカトリック教会の国際的関係性を顕示するとともに、同時に「愛国」と「信仰」の一致を強調し、帝国主義・軍国主義的状况におけるカトリック教会の立場の強化に努めた<sup>27</sup>。

こうした努力において1597年に長崎で殉教した二十六聖人は中心的な役割を果たすことになる。1930年代初頭からカトリック教会関係者は日本人殉教者たちを「犠牲」を重んじる「日本の精神」の体現者として称え、「カトリックの精神」と「日本の精神」の一致を示すものとして事あるごとに喧伝するようになる<sup>28</sup>。

しかし、二十六聖人をはじめ16世紀から17世紀に長崎で殉教した者には多くの外国人宣教師が含まれており、二十六聖人は「愛国」と「信仰」の一致の表現であると同時に、国境を超えた「信仰」のもたらす国際的関係性を再起動する材料としても機能することになる。

例えば、1930年初頭に長崎出身のカトリックの実業家、平山政十は私財を投じて二十六聖人に関する映画を作り、欧米で上映会を催すが、この映画を観たメキシコ、グアダハラの大司教は、長崎の早坂司教に対してメキシコ人宣教師を含む二十六聖人を記念する場所の整備のための資金提供を申し出る。辞任した早坂司教からこの事業を引き継いだ山口はそのための土地などを確保、1939年7月には「地開き初め」を挙行している<sup>29</sup>。

<sup>26</sup> 大宰は後に平戸教会主任司教だった時に天皇や皇室を「冒瀆」したとして、出津教会の主任司教の中島万利神父共に「不敬並に言論出版集会結社等臨時取締法違反」として送検されている（明石・松浦 1975, 306-307）。

<sup>27</sup> 例えば、1938年3月17日に「防共の盟邦」としてイタリアから派遣された「ファシスト訪日親善使節」が長崎を訪問した際、イタリア語を話す山口は長崎県知事の挨拶を通訳したほか、ローマ留学の経験のある他の教区司教と共に使節団を歓待し、長崎市長らが列席した雲仙観光ホテルでの晩餐会にも同席、イタリア代表団団長の通訳も務めた。また、翌朝には訪問団のためのミサを捧げている（『カトリック教報』、1938年4月1日）。

<sup>28</sup> 例えば、キリシタン史を研究した片岡彌吉は日本の殉教者に寄せて、「日本キリシタンによって發揮された日本精神の美しさ、血によって光彩づけられたその美しさの陸離たるを想ふ」と述べている（片岡彌吉、「日本キリシタン——日本的なるもの」、『カトリック教報』、1940年10月1日）。

<sup>29</sup> 「司教様の手で地開き工事始め——廿六聖人殉教地」、『カトリック教報』、1939年8月1日。映画は日活が制作。1932年に平山は自ら欧米を訪問しこの映画の上映を各地で企画した（山梨 2010）。ロサンゼルスで映画が上映された際に、平山はメキシコのグアダハラ大司教であったオロスコ・イ・ヒメネス（Orozco y Jiménez）にこの映画を見せる機会を得、その場で大司教は長崎にメキシコ人宣教師を含む二十六聖人を記念する教会を建設する資金を準備することを約束したとされる（Arimura 2014: 117-119）。この事業は平山が仲介して当時の早坂司教とヒメネス大司教が進め、ロサンゼルスやグアダハラの実業家らが資金を提供することになった。しかし、1936年にヒメ

さらに、この事業と関連して同時期に山口はアメリカから長崎へカトリック巡礼団を招聘する計画に関わる<sup>30</sup>。この企画は1938年5月24日に長崎を訪問したサンフランシスコの親日ジャーナリストであったフレデリック・ウィリアムズが提案したものである<sup>31</sup>。ウィリアムズは1937年2月に開催されたマニラ万国聖体祭のアメリカ代表団の広報を担当した人物で、日本の中国での軍事工作などを正当化する出版物などを積極的に出版した人物である<sup>32</sup>。1938年12月山口はサンフランシスコのミッティ大司教へ書簡を送り殉教地巡礼の実現のための協力を要請し、計画されている日米のカトリック信徒の交流は、時局に鑑みて、カトリック教徒の国際的関係性を示すことになり、日本における宣教活動の躍進にも役立つだろうと述べている<sup>33</sup>。米国からの巡礼団の到着に合わせて長崎では二十六聖人に関する「野外劇」の上演も計画された<sup>34</sup>。しかし、日米関係の悪化もあり、巡礼計画は中止となる<sup>35</sup>。

このように戦中、山口は「愛国」と「信仰」の精神的な一致を説きつつ、教区を戦時体制への積極的な協力へと導いた。山口自身が司教としてそれを体現することになったカトリック教会の「日本化」、そして教会の「反共」の立場は、国境を超えた教会の立場でもあり、そこに「愛国」と「信仰」の一致

---

ネス大司教が急逝、1937年には早坂司教が辞任することとなり、ヒメネス大司教の後継者と早坂司教の後継者である山口司教に引き継がれた（「信仰を楔に日、墨、米の親善——メキシコ人の手で聖者偲ぶ大殉教者の遺跡へ米国人巡礼団」、『東京朝日新聞』、1938年10月3日）。1940年には記念碑建立工事も始まったとの報道があるが（「日本二十六聖殉教者之碑——建立工事始まる」、『カトリック教報』、1940年2月1日）、記念地整備事業は戦後まで本格化しない。

<sup>30</sup> 「米國から大巡禮團をこの殉教聖地に送り度い」——カトリック新聞界の大立物ウイリアム氏來崎、『カトリック教報』、1938年6月1日。

<sup>31</sup> ウィリアムズは、1937年2月のマニラ万国聖体大会で出会った小田急電鉄社長の長女で神奈川県でカトリック学校大和学園を運営していた伊東静江とその子供の伊東百合子を1938年にアメリカに招きアメリカのカトリック家族と交流させる事業も実現している（「信仰を楔に訪れる百家庭——伊東女史母娘が日米親善の鹿島立ち」、『カトリック教報』、1938年8月1日）。この交流がアメリカから長崎への巡礼計画のきっかけとなったとも報道されている（「信仰を楔に日、墨、米の親善——メキシコ人の手で聖者偲ぶ大殉教者の遺跡へ米国人巡礼団」）。

<sup>32</sup> マニラ万国聖体大会には、東京大司教シャンボンを名誉団長、長崎教区出津教会出身でカトリック新聞編集長であった田口芳五郎を団長として、日本から128名のカトリック信徒や司祭が参加し、長崎からも18人が参加した（浦上小教区 1983, 92, 山梨 2011, 71）。しかし、山口は1936年から鹿児島へ転出しており、関与した形跡はない。この大会への参加は長崎教区にとって重要な出来事、長崎から参加したキリシタン史研究で著名な片岡彌吉は1614年にキリシタン迫害の中マニラへ渡った高山右近に関する遺跡調査をした（浦上小教区 1983, 92-97）。この日本巡礼団の派遣には外務省が深く関わり、カトリックの祭壇を備え、カトリック信徒が船長を務める日本郵船の龍田丸をサンフランシスコに派遣して、米国巡礼団を横浜まで運び、そこから神戸を経て、マニラへの船上日米の巡礼団が交流した。カトリック教会の行事に外務省が深く関わったことについて、山梨淳は「カトリック教会の国際行事を通して、日本イメージの国際的向上を図り、海外での勢力の伸長を望む日本政府の意向と、聖体大会への参加を機会に愛国者的な役割を果たすことを望む日本カトリック教会の思惑が一致したがため」としている（山梨 2011, 72-73）米国からの巡礼団にはフィラデルフィア大司教のドハーティ枢機卿、サンフランシスコのミッティ大司教が参加し、両氏はマニラからの帰途東京に立ち寄り天皇陛下と謁見した他、靖国神社に参拝し、カトリック教会の神社参拝問題への立場を確認することになった（山梨 2011, 86）。

<sup>33</sup> Letter from Paul Yamaguchi, to John J. Mitty, Archbishop of San Francisco, December 7, 1938, Official Correspondence Files, 1938-1939, X-Y, Archives of the Archdiocese of San Francisco. ミッティ大司教も友好的な返事を山口に出しているが、ウィリアムズから巡礼の話は何も聞いていなかったようで、ウィリアムズが少々先走ってしまっている感もある。Letter from John J. Mitty, to Paul Yamaguchi, December 29, 1938, Official Correspondence Files, 1938-1939, X-Y, Archives of the Archdiocese of San Francisco.

<sup>34</sup> この野外劇は二十六聖人に関する映画にも関わった上智大学総長ヘルマン・ホイヴェルスが指導することになった。「殉教者の子孫たる信者の手で廿六聖人野外劇——聖者等が発露した日本精神顯現を主眼として」、『カトリック教報』、1939年9月1日。

<sup>35</sup> 「米國巡禮團來朝中止——國際情勢の變化で」、『カトリック教報』、1939年9月15日。なお、日米開戦後ウィリアムズは日本政府から金銭を受け取って親日の記事を書いていた事実を追及され訴追、拘束される。「U. S. Trial to Expose Japs' Propaganda: Frederick V. Williams to Face Accusations of Aiding Tokyo», *The Press Democrat* (Santa Rosa, California), February 5, 1942. ウィリアムズと山口司教の交流は戦後にも引き継がれ、戦後ウィリアムズ氏が長崎の殉教史をまとめた際にはサンフランシスコで山口と再会している。「親日米人が著わす長崎の殉教者」、『カトリック教報』、1951年3月1日。

の根拠の一つを見据えながら、その一方で山口は長崎にあってカトリックの信仰が繋ぐ国際的関係性を機会あるごとに手繰り寄せて国境を超えた「信仰」の「普遍性」を喧伝しようとした。それは山口にとってカトリックのコスモポリタニズムを体験し、さらに排外的な時代の日本にあってそうした国際的関係性の中で活動することが「愛国」と矛盾しないことを示す機会でもあっただろう。しかし、ここで見たように「愛国」と「信仰」の一致には様々な形でほつれが顕在化したのである。

### 3. 信仰による一致、再び——インドネシア・フローレスにおける「宗教宣撫」——

戦時中長崎司教として「愛国」と国境を越える「信仰」の一致を探りながら教区の舵取りをした山口だが、1943年8月、広島教区長（広島使徒座代理区管理者）でイエズス会士の荻原晃、新潟出身で横浜教区司祭の久野茂、そして長崎教区で司祭に叙階されたばかりの岩永六郎とともにインドネシアのフローレス島に「宗教宣撫」のために派遣されることになる。皮肉にもこの戦時工作への参画を通じて山口はローマ留学時代に体験した共通の信仰を通じた「一致」を再体験することになる。

カトリック教会による「宗教宣撫」は、1941年12月以降の日本軍の東南アジア侵攻・占領にあたって組織されたもので、1942年にはフィリピンに多数のカトリック司祭、修道士、信徒が派遣された。しかし、当初フィリピンのカトリック教会の指導者の協力を得るのが難しく、その調整のため大阪司教の田口芳五郎も派遣された（寺田 1996、志村 1991, 37-47）。また、グアムには山口の同級で浦上出身の深堀仙右衛門福岡教区長（後の福岡司教）とミクロネシアでの宣教経験のある小松茂が派遣されている（深堀 1943）。これらの「宗教宣撫」は陸軍省が組織したものであったが、1942年7月以降のインドネシア占領において軍政は海軍省の管轄となった地域については1943年に同地域で民政部が設置され軍政が始まると同時に同様の宗教宣撫隊が組織された（原 1995、坂井 1980）。

山口は1946年に再刊されたばかりのカトリック雑誌『聲』に「南方記」と題する手記を寄せ、インドネシアの2年余を振り返っている。この手記の内容は概ね当たり障りのないエピソードで、現地に関わった海軍や民政部関係者、神言会の宣教師たち、そして信徒たちへの感謝の言葉が散りばめられている。山口は後述するような自らが現地で直面した難局、そして海軍や軍政を担当した民政部とどのように交渉し、いかにしてそうした難局を乗り越えたかなど、他の関係者が書いた記述に見られる山口の果敢な行動には全く触れない。しかし、思いがけなくフローレスで歓迎されたこと、そして到着当日訪れた大聖堂で聞いた聖歌でローマを思い起こし現地の宣教師や信徒から教皇からの使節として迎えられていることに気付いたことなど、山口が共通の信仰を通じて体験した一致のうちに心に生じた感情が記されている（山口 1946）。

山口の手記によれば、山口は1943年7月に教皇使節パオロ・マレラに呼び出され上京。マレラからインドネシアでの「宗教宣撫」への協力を求められる。この件についてマレラはヴァチカンと連携しており、戦時の状況を考えると拒否できないと山口に伝えたという。そこで山口は海軍省へ出頭。純粋な宗教活動という言葉を得て派遣を承諾したとしている（山口 1946, 21）。

山口らが派遣された当時、フローレス島の人口は約700,000人。島民の約半分がカトリックであった

(荻原 1966, 28、山口 1946)。キリスト教が島に伝えられたのは16世紀のことであるが、その後1910年代から1920年代にオランダの神言会が宣教に入り改宗者が増え、オランダ政府から現地の学校の運営などを任されることになる(青木 2002, 263-266、Steenbrink 2007, 77-152)。

しかし、1940年にドイツがオランダに侵攻すると、オランダ政府は島で活動していた神言会員でドイツ人の宣教師を拘束し抑留した。そのため大幅に司祭の数が減少することになった。1942年には日本軍がフローレスを占領。当初日本軍の方針は占領地において敵性外国人を抑留する方針であり、ほとんどのオランダ人宣教師がスラウェシ島のマカッサルの収容所に収容された。山口司教が到着した当時には7名の神言会ヨーロッパ系司祭と直近に司祭に叙階されたばかりのインドネシア人の神父4名が島民への司牧にあたっていた(Heyden, n.d., 8-9、荻原 1966, 28-29、山口 1946)。

山口らは1943年8月にフローレスに到着。一行は現地のカトリック教徒、そしてフローレスを管轄する小スンダ列島司徒座代理区長のレーフェン司教ら神言会宣教師たちに出迎えられる。しかし、この日、山口らは海軍の司令官や民政部幹部から島に残されていた外国人宣教師たちを抑留する予定であることを知らされている(荻原 1979, 36-37、佐藤 1961, 64)。その夜山口は思い立って司令官として着任したばかりの佐藤<sup>たすく</sup>佐大佐の宿舎へ一人で行き、抑留を止めるよう直訴した(佐藤 1961, 64-66)。

山口と荻原はレーフェン司教とともに島を巡回して各地の教会を訪問することになっていたため、佐藤大佐はその視察の終了まで外国人宣教師たちの抑留を実行しないことを約束する。大佐はその旨マカッサルの本部へと連絡(佐藤 1961, 67-68)。視察が終わった後、山口は抑留が不必要であるばかりか、フローレス島の民政にとって不都合を生じる旨、詳細な意見書を佐藤に提出した。佐藤はこれを受けて本部に状況を報告(佐藤 1961, 127-133)。しかし、本部から返事はこず、そして最終的に宣教師たちは引き続き島に残ることが決まる(佐藤 1961, 166-167)。

しかし、その後山口は何度も困難な状況に遭遇する。例えば、山口と荻原が島内視察から戻った直後、小神学校の校長で神言会のオランダ人宣教師の一人コルネリセン神父らがスパイ容疑で拘束されてしまう。この時山口は粘り強く海軍や民政部と交渉し、コルネリセンらの解放に成功する。この後もオランダ人宣教師らが一時的に拘束されるたびに山口は海軍の司令官や民政部の役人らと話し、解放している(佐藤 1961, 115-124)。

山口は8月下旬に広島と長崎の原爆、そして終戦の知らせを受けた。神言会の宣教師が残した資料によれば、山口は8月29日に外国人宣教師が集められていた修道院を訪れ「ベルム・フィニトゥム・エスト bellum finitum est」(「戦争は終わった」)とラテン語で終戦の知らせを伝えた(Heyden, n.d., 57)。これより前に、長崎教区から山口に同行していた教区司祭の岩永六郎は終戦の知らせを宣教師たちに沈痛な表情で伝えたとされる(Leven, n.d., 163)。しかし、詳しい手記を残したコルネリセンは、長崎原爆のことも知っていた山口はそうした心配事に一切触れず、「フローレスにいる間はフローレスのために働こう」と述べ、宣教師たちと終戦の喜びを分かち合ったという(Cornelissen 1949: 113)。

これらの山口の「決断」に対して、終戦後、神言会のオランダ人の宣教師たちはいずれも最大限の賛辞を送った。フローレスで山口と行動を共にした小スンダ列島司徒座代理区長レーフェン司教は山口ら

日本人司祭のことを「天から送られた天使」と呼んだ<sup>36</sup>。山口がフローレスを去った日にレーフェン司教の秘書役であった神言会のオランダ人宣教師ファン・デル・ハイデン神父も山口は「神が送った天使」だったと1945年9月7日の日記に記している（Heyden, n.d., 58）。のちに詳細な手記を書いたコルネルセン神父も、残虐行為をした日本人兵士もいたが、日本人の中に山口のように徳の高い人物がいたことを記しておきたいと述べ、山口との出会いについて「聖人に会った」とまで記している（Cornelissen 1949, 114）。山口ら日本人司祭4人がオランダの宣教師たちと良好な関係を築いた上に、共有する信仰を通じた深い「一致」を経験した。コルネリセンは山口らと出会うまでこうした教会の「一致」を体験したことはないとも記している（Cornelissen 1949, 82）。

山口らは終戦後もこうした信仰を通じた「一致」をまた別の形で経験することになる。終戦の知らせを聞いた直後山口はスラウェシ島のマカッサルへ移動する。当初は現地のカトリック信徒の家に身を寄せていたが、1945年9月にオーストラリア軍の従軍司祭2人の訪問を受ける。この訪問の経緯は明らかではないが、オーストラリアの従軍司祭は長崎の司教がスラウェシ島にいることに驚いたに違いない。しかも山口司教はシドニー大司教であったギルロイ枢機卿とローマのウルバノ大学留学時代に同級であったという。そこで従軍司祭の一人はギルロイ枢機卿に連絡をとり、山口の存在を知らせ、山口が長崎司教区へ早期に戻ることを希望していることを伝える。またこの従軍司祭は山口にギルロイ枢機卿に直接手紙を書くことを勧め、山口はギルロイ枢機卿にイタリア語の手紙を書いている<sup>37</sup>。この手紙は現在行方不明であるが、この手紙を受け取ったギルロイ枢機卿は山口のフローレスでの活動を「見事な」働きと称えているので、山口は手紙で自身のフローレスでの活動について詳しく報告したものと思える<sup>38</sup>。また、ギルロイ枢機卿の秘書からの手紙では、枢機卿は山口の働きに「心を動かされた」と述べている<sup>39</sup>。

ギルロイ枢機卿はすぐに動きオーストラリア教皇使節に連絡する。山口がイタリア語で書いた手紙を同封して司教がスラウェシで抑留されている背景を説明。原爆で被害が出た長崎教区の状況を考えて、早期帰国を可能にするようにオーストラリア政府に働きかけてほしいと求めた。山口についてウルバノ大学で同級であったことを述べ、さらに山口は「親しみやすい性格であったが、手紙の文面から見る限り全く変わっていない」と山口の人となりを称賛。「連合政府にとって協力的な司教となり、日本の秩序を再構築するという困難で重要な課題を助けるだろう」とも述べている<sup>40</sup>。これに対してパニコ教皇使節は、ビーズリー陸軍大臣に手紙を書き、山口司教が東インド地域に日本の教皇使節の了解のもと派遣されたこと、さらに、マカッサル使徒座代理区長と小スンダ列島使徒座代理区長の言葉を引用して、山口がフローレスで行った活動への賛辞を述べる。長崎への早期帰還を促すよう要請している<sup>41</sup>。山口

<sup>36</sup> Letter from J. Panico, Apostolic Delegate to Australia and New Zealand, to John Beasley, Minister for Defense, October 31, 1945, in A1066, IC45/29/4, National Archives of Australiaに引用。

<sup>37</sup> Letter from E.B. Phillips, Chaplain, 2/9 Australian Infantry Battalion, to Cardinal Gilroy, Archbishop of Sydney, October 21, 1945, Archives of the Archdiocese of Sydney.

<sup>38</sup> Letter from Cardinal Gilroy, Archbishop of Sydney, to E.B. Phillips, November 6, 1945, Archdiocese of Sydney Archives

<sup>39</sup> Letter from John Toohey to Charles Cunningham, November 2, 1945, Archives of the Archdiocese of Sydney.

<sup>40</sup> Letter from Cardinal Gilroy to J. Panico, Apostolic Delegate to Australia and New Zealand, October 31, 1945, in A1066, IC45/29/4, National Archives of Australia.

<sup>41</sup> Letter from J. Panico, Apostolic Delegate, to John Beasley, Minister of the Army, October 31, 1945, in A1066, IC45/29/4, National Archives of Australia.

はその後収容所に収容されるが、1945年12月25日にボルネオのバリックパパンに移送され、そこで荻原と再会、翌日日本へ向けて出発した<sup>42</sup>。

戦中、長崎教区にあって、山口は「愛国」と「信仰」の一致、さらに、「犠牲」の精神を通じた「日本の精神」と「カトリックの精神」の一致を説き、戦時体制への協力を進めながら、カトリックの国際親善を通じて信仰に基づいた「一致」を演出しようとした。しかし、これら多くの努力は実らなかった。

これに対して「宗教宣撫」のために赴いたフローレスにあって、そして終戦後の抑留生活の中で、山口は信仰を通じた「一致」を再び体験することができた。しかし、それは山口がフローレスで日本軍政の方針に辛抱強く抵抗する決断をしたからである。そしてその決断はローマ留学時代の旧友、ギルロイ枢機卿の心を動かし、収容所生活から早期解放を導いたばかりでなく、後述するように、そうして再起動されたギルロイ枢機卿との友情関係は戦後の長崎教区の復興にも寄与することになる。

長崎に帰ってからの山口司教は精力的に教区の復興のために動いた。連合軍占領政策はキリスト教宣教活動を支援する方針をとり、カトリックをはじめとするキリスト教各派は敗戦を日本での宣教拡大の好機と捉えていた。こうした中すでに日本で活動していたイエズス会などの外国宣教団はカトリック教会を復興させるための委員会を組織し、占領軍と連携してアメリカの司教による視察を要請。1946年7月にはオハラ司教とレディ司教の二人の司教が来日、秋には両司教はヴァチカンに報告書を送っている（濱田 2017）。こうした流れの中で海外から人的・物的支援が日本に注がれ各派の事業拡大に寄与した（三好 2021, 154-159参照）。

長崎にあっては、山口司教は、独自に、ローマ留学時代、さらにはインドネシアでの宗教宣撫活動時代に築いた個人的な関係を使って、長崎教区の復興のための海外からの支援の充実に力を注いだ。まず、1946年11月末にはオーストラリアからギルロイ枢機卿と、やはり山口のローマ留学時代の同級生マケイブ司教が来日。この訪問の主たる目的は長崎への訪問であった。この訪問はギルロイ枢機卿自らの希望で実現したものである。ギルロイ枢機卿は在オーストラリア教皇使節へ報告書を提出している。帰国後ギルロイは早速教区司祭を長崎に派遣した。3人の司祭は1947年に長崎に到着、5年間教区司祭として活動した<sup>43</sup>。

また、山口は、前述のように戦中自ら設立した東陵学園を、神言会へ移管するために努力するが、1950年に訪れたローマではフローレスで行動を共にし神言会副総会長となっていたファン・デル・ハイデン神父と再会。その縁もあって移管が実現し、同学園は長崎南山学園となった（南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 2007, 92-95）。

<sup>42</sup> 「山口司教、荻原権司教かへる」、『カトリック新聞』、1946年2月10日。荻原は終戦後ボルネオで連合軍に拘束され、収容所での生活を余儀なくされるが、荻原もオーストラリアの従軍司祭との出会いの中でカトリック司祭としての特例的待遇を受け、特別のテントでミサをあげることも許される。クリスマスには従軍司祭の招きでミサを共同司式。深夜のミサでは荻原が司式した（荻原 1966 201-209, 221-228）。

<sup>43</sup> “The Visit of His Eminence Cardinal Gilroy, Accompanied by Bishop McCabe to Japan,” Archives of the Archdiocese of Sydney. 興味深いことに、これに先立って、偶然にも1946年11月12日に山口司教はギルロイ枢機卿に手紙を書いている。この手紙の中でローマ留学をともにしたことを思い起こすとともに、インドネシアからの帰還のためのギルロイ枢機卿の仲介に感謝している。この手紙は1947年に企画されていた殉教350周年の記念行事への招待状であった（Letter from Paul Yamaguchi to Cardinal Gilroy, November 12, 1946, Archives of the Archdiocese of Sydney）。オーストラリアからの司祭の到着についてはLetter from Paul Yamaguchi to Cardinal Gilroy, October 12, 1947, Archives of the Archdiocese of Sydneyを参照。

ところで、山口は1955年から1956年まで天主堂再建のための資金集めを主たる目的として渡米したが、この旅行には1952年10月から山口の招きにより長崎教区で活動していた聖アウグスチノ修道会の3人の宣教師が協力した。

聖アウグスチノ修道会との関係は1951年に春に日本を訪問した聖アウグスチノ修道会の司祭トーマス・ハントと山口との会話がきっかけだった。当時ハントはオーストラリアのブリスベンで活動していたが、この年故郷のアイランドへ旅行する途上日本に立ち寄った。その際に教皇使節マレラを始め複数のカトリック教会関係者、そして日本の司教たちと面会の機会を持つ。とりわけ広島教区の荻原と長崎教区の山口と面会。両者とも聖アウグスチノ修道会の援助を要請した。特に山口は熱心に16世紀に聖アウグスチノ修道会の司祭らが長崎で宣教活動をしたこと、そして長崎で殉教者を出していることを指摘して、聖アウグスチノ修道会の長崎への帰還を強く要請した。1951年5月にアイランドへの途上立ち寄ったフィラデルフィア州ヴィラノヴァでハントは聖アウグスチノ修道会ヴィラノヴァ管区長であったジョセフ・ドハーティにこの話をした。この話を聞いてドハーティは大きな関心を持ち、後日ハントにさらなる情報の提供を求めた。1952年4月5日の手紙でハントは山口との会話などを紹介。ただ、長崎はすでに多くの司祭がいることから、ハントは広島への宣教師の派遣を推薦した<sup>44</sup>。

しかし、ドハーティは長崎への宣教師の派遣を決め、早速5月には聖アウグスチノ修道会ローマ総本部の許可を得て、驚くべき速さで宣教師の長崎への派遣を手配し、山口へ知らせている<sup>45</sup>。10月にはトーマス・パーセルをはじめとする3名の聖アウグスチノ修道会の司祭が長崎へと旅立った<sup>46</sup>。

山口の訪米の話題が出るのはこれらの司祭の長崎到着の後である。1954年8月4日の手紙には聖アウグスチノ修道会が山口の訪米を支援するようパーセル神父から具体的な要請があり、司教はローマの許可を得て米国へ7ヶ月滞在することになる。聖アウグスチノ修道会はヴィラノヴァ大学の名誉博士号を山口に授与することを決めたり、山口の渡航資金を助成したり、アメリカ各地での山口の滞在先なども世話した<sup>47</sup>。

カトリック教会とカトリックの信仰を通じて国境を超えた関係性はこのように特定の出会いと個々人の心の動きにおいて再確認・再体験されたわけだが、1955年から1956年にかけての山口によるアメリカとカナダにおける旧浦上天主堂再建のための募金活動はこうした具体的な国際関係性の中で展開したものである。この論文の冒頭で触れたように、山口の決断にアメリカからの圧力を感じずの高瀬は、山口がアメリカのカトリック信徒の信仰生活を垣間見てそれに感化されると同時に、またカトリック信徒からかつて敵国であった日本の司教である自分を歓迎する姿に心を動かされていることに違和感を感じている。しかし、それは山口にとっては共通の信仰に基づいた「一致」を再確認するもう一つの機会である。

---

<sup>44</sup> Letter from Thomas Hunt, Villanova College, Brisbane, Australia to Joseph M. Dougherty, April 5, 1952, Archives of the Augustinian Province of St. Thomas of Villanova.

<sup>45</sup> Letter from Joseph M. Dougherty to Paul Yamaguchi, May 5, 1952; Letter from Paul Yamaguchi to Joseph M. Dougherty, September 7, 1952, Archives of the Augustinian Province of St. Thomas of Villanova.

<sup>46</sup> Edwin T. Grimes, "Operation Nagasaki", *VILLANOVA Alumnus*, XV, no. 3, March 1953, 6; Letter from Paul Yamaguchi to Joseph M. Dougherty, October 2, 1952, Archives of the Augustinian Province of St. Thomas of Villanova.

<sup>47</sup> Letter from Thomas Purcell to Joseph M. Dougherty, August 4, 1954; Letter from Thomas Purcell to Joseph M. Dougherty, August 16, 1954; Letter from Paul Yamaguchi to Henry E. Greenlee, April 12, 1955, Archives of the Augustinian Province of St. Thomas of Villanova.

あった。

ところで、聖アウグスチノ修道会のヴィラノヴァ管区長のドハーティが1952年5月5日に山口に書いた最初の手紙の原稿に興味深い記述がある。この中でドハーティは、ハントとの会話以来日本に宣教師を送ることが「何度も、特にミサを捧げている間に頭をよぎる」と述べている<sup>48</sup>。ドハーティは、ミサでの祈りを通じて長崎へ宣教師を派遣する強い決意を固め、それを素早く行動に移し実行したのである。

1951年春の長崎での山口とハントの会話、その直後のヴィラノヴァでのハントとドハーティの会話は、17世紀長崎での聖アウグスチノ修道会の修道士の殉教の記憶を再起動し、それはドハーティの「祈り」を通じて、聖アウグスチノ修道会と長崎の関係の再構築へと展開した。浦上天主堂の再建に取り組む山口の決断は、こうした司祭たちの心の中で再確認された国際的関係性に位置していたのである。

#### 4. 祈りの実践

日本占領下のフローレスでの山口ら日本人カトリック司祭の活動の記録を書いた神言会のオランダ人宣教師のCornelissenによれば、フローレスで困難な状況に直面した山口は、その都度、海軍や民政部幹部と上手に交渉したという。例えば、Cornelissenは、1943年10月、神言会宣教師らが一箇所に集められて抑留状態に置かれた時の山口の行動を記している。山口は海軍や民政部幹部との交渉機会を待ち、その準備を怠らなかつた。交渉の機会が来るとその準備に時間をかけ、考えを紙に書き留め、そして聖体の前で静かに祈ったという (Cornelissen 1949, 93)。

司祭であり、司教である山口が祈ったということ自体驚くべきことではないかもしれない。しかし、山口が難しい状況において判断や決断を迫られているときに祈ったということは、旧浦上天主堂廃墟保存問題をはじめとする山口の決断に関する議論に新たな次元の問題を導入することになる。山口の決断が祈りを伴っていたとしたら、それは何を意味するのだろうか。

山口の祈りの実践について詳しい資料はない。ここではあくまでも実験的に山口の周辺における祈りの実践や祈りについての考え方を手がかりに決断と祈りの関係について考察する。

戦後のことであるが、山口に近かった教区司祭の中島政利が、会合など用事の折に山口を車で送迎する際、山口は車内でいつも聖母マリアへの祈りを捧げていたと記している。その際に山口は「聖マリアの連禱」をラテン語で唱え、運転手役の中島がやはりラテン語で（「われらを憐み給え」などと）「応唱」していたという (中島 1990, 163)。「聖マリアの連禱」（現在では「聖マリアの連願」と呼ばれる）とは、聖母マリアの取り次ぎによって神の憐みと助けを求める祈りである。ここで「取り次ぎ」というのは、聖母マリアの様々な徳を称え、それを唱えながら、聖母マリアに、祈る者に代わって、神に祈ってくれるように願うからである。

1920年代から1930年にかけての長崎教区における祈りの実践の一例として、長崎教区の司祭で多く

---

<sup>48</sup> Letter from Joseph M. Dougherty to Paul Yamaguchi, May 5, 1952の原稿、Archives of the Augustinian Province of St. Thomas of Villanova.



の著作や翻訳書を刊行した浦川和三郎による『聖マリアの連禱』（浦川 1920）がある。浦川によれば「連禱とはイエズス様なり、マリア様なりの御徳を数へるか、聖人等の御名を稱へるかして、天主様に申し上げる、極く短い、熱烈な祈禱を謂ふ・・・目的とする所は、固より天主様を讃美し、其の御憐れを求めるに在る・・・自分の希望や祈願や嘆求やを、イエズス様の限りなき功德に合せ、聖母マリア、聖人等の清い御心、汚れなき御手を以て、天主様の尊前に進め奉る」（浦川 1920, 11）技法である。苦難や危機の状況において「自然に口を突いて出て来るもので・・・別段夫れと順序もなく、纏まった思想もなく、少の飾氣すら無い・・・兎に角腹の底から迸り出る絶叫」だとしている（浦川 1920, 11）。聖母マリアに「われらを憐み給え」と願う。しかし、浦川は、願いが神の「思召」にかなっていないことを強調する。「我身の思考でも、希望でも、計畫でも、幾ら大事に思つて居るのにせよ、若し天主様の思召に適はないならば、潔く抛棄てる決心であらねばな」らないと述べている（浦川 1920, 56）<sup>49</sup>。祈りにおける中心的な問題の一つは、まさに自分の「願い」、「判断」、「決断」と、神の「思召」あるいは「御心」との関係である。もちろん修道者として、司教として、神の「思召」を理解することは容易ではない。祈りは心を神へ向かわせる技法ということになる。

やはり浦川が翻訳した『司祭の日常生活』（浦川 1935）という本がある。浦川はこの本の中で司祭の毎日の祈りの実践である「聖務日禱」と司祭の「内的生命」に関する箇所を特に気に入っていたようで、1920年代には長崎神学校でそれらの箇所を授業で使っていたと序文に書いている。ここで強調されるのは、司祭が欠かさず捧げなければならない毎日の祈りは、教会、世界、そして司祭自身の「内的生命」、すなわち永遠の命へと向かう靈魂の活性化のために行う祈りであるということだ（浦川 1935, 242-246）。また、神と共に歩む司祭にとって、世俗の論理は司祭の内的生命を脅かすものであるとともに、内的生命はそうした世俗の論理から司祭を守るものであると論じている。ここで重要な点は修道院に籠って求道するのではなく、社会において世俗の論理の中で活動することを聖務とする司祭にとって、「内的生命」と「活動的生命」の両立こそ最も重要な課題であるということだ。だからこそ「内的生命」を祈りと黙想を通じて維持強化することが重要だとされる（浦川 1935, 450-451）。ここで問題とされるのは「世俗」の論理と「永遠」の論理の相克である。司祭は苦難あふれる社会の中であって神による靈魂の救いの技に参加する役回りだが、そのために「社会」の論理と「神」の論理との緊張関係の中に身を投じなければならないので、日々その緊張関係を念頭において判断・決断するために祈り、黙想するのである。

こうした指南書を多く翻訳した浦川は、山口にとって同じ浦上出身の司祭で先輩に当たる。浦川は1910年から長崎神学校で教鞭をとり、1928年からは同校校長を務めたが、山口は1910年代に長崎神学校で学び、その後ローマ留学から帰国後五島鯛ノ浦教会での短い司牧期間を経て長崎に戻り1927年から3年間長崎神学校で教鞭をとっている（カトリック長崎大司教区 1977, 161）。神学校の教授として、また、同僚として、浦川が、そして浦川の翻訳書が山口にどのような影響を与えたかわからない。しかし、山口が、神学生、司祭、そして司教としての靈的修行の中で、また司牧活動における日々の判断・決断の中で、神の助け求めて祈り、黙想してきたことは間違いない。

<sup>49</sup> 長崎神学校（長崎公教神学校）の歴代校長や教授のリストはカトリック長崎大司教区（1977, 161）を参照。

もちろんここで私は、浦川が長崎で神学生や教区司祭のために翻訳した本の内容を参考にして同時代を生きた山口の祈りの実践の輪郭を想像しているに過ぎない。戦後になるが、1953年に山口は「祈り」というテーマで信徒に向けた「教書」を書いている。ここで山口は「信仰の光で見る人生の行先、それは私共が一人残らず否でも應でも落付かねばならぬ永遠の世界である」が、それを世俗的な「欲」や「誇り」に駆られて忘れがちであると指摘する。永遠の命を得るために、祈りを通して「超自然的生命のみなざる生活」を送らなければならないと説いている<sup>50</sup>。これは先程の「内的生命」のことである。1957年の「教書」でも「この世の総てのものは過去ってゆく空しいものであります。・・・全世界の総ての宝をもってしても贖うことの出来ない魂、魂の値打はそれ以上なのであります」と説く<sup>51</sup>。そして、人生として与えられた時間を「永遠」の論理と一致させ「神の愛」に満ちた生活をする事の重要性を強調する<sup>52</sup>。1959年の「年頭の辞」では「時は他愛もないものである」と同時に「時は総てである」と言い、「神は我々に時を与えて、終わりなき生命を得る方法を教え給う。かくて他愛もない時は、同時に総てとも成り得るのである・・・[大切なことは] 永遠に過ぎ去らない愛に生きることである。それは神の愛である。我々を完全な信者となし、永遠に生かしむる神の愛に生きることである」と説く<sup>53</sup>。ここで山口が強調するのは「時間」と「永遠」を「愛」を通じて「一致」させることであり、そのための絶えざる努力、祈りの必要性である。

浦川の翻訳した指南書も、山口の司教教書も、ある意味で祈り、そして信仰生活のあるべき姿を示すものに過ぎない。しかし、これらは祈りというものが日常の世俗の論理と神の論理、あるいは「時間」と「永遠」という構図の中でそれらを調停しようとする営みであることを示している。この文脈から見れば、フローレスでの難しい状況において、聖体を前にして、山口は、海軍司令官や民政部監理官との交渉という極めて世俗の世界における判断や決断を、神の論理、「永遠」の論理と摺り合わせようと祈ったと言えるかもしれない。そして、山口の決断は結果的にフローレスの教会を守ることにつながり現在に至るまでフローレスでは山口のことは好意的に記憶されてきた (Beding 2012)。

## 5. 「思想」と「決断」

『浦上天主堂』という和英二か国語で書かれた小冊子がある (永井 1949)。『この子を残して』や『長崎の鐘』が売れ有名になっていた永井隆が私財を投入して自ら編集した小冊子で浦上天主堂から1949年8月に発行されたものである。山口はこの小冊子を「米・豪など世界各地に」送付し浦上天主堂再建への支援を募った<sup>54</sup>。この冊子には原爆のキノコ雲、戦前の浦上天主堂の姿、戦後に建設された

<sup>50</sup> 山口愛次郎、「祈る心構えを確保せよ」、『カトリック教報』、1953年3月1日。

<sup>51</sup> 山口愛次郎、「救霊の肝要さと教區の傳統的信仰を説き布教活動への協力を要請」、『カトリック教報』、1957年4月1日。

<sup>52</sup> 1958年の「年頭のことば」では「私共に大切なことは、この貴重な時を立派に使うことであります。そしてその方法は、申すまでもなく人生の目的に添うて時を過ごすこと即ち天主を愛し、愛の証明をしていくことです」と述べている。山口愛次郎、「神の國とその義を」、『カトリック教報』、1958年1月1日。

<sup>53</sup> 山口愛次郎、「万事にこえて神を愛せよ」、『カトリック教報』、1959年1月1日。

<sup>54</sup> 「グラフ 『浦上天主堂』海外へ」、『カトリック教報』、1950年1月1日。

仮聖堂、1949年の「ザビエル祭」の写真などが収められ、それぞれに永井が書いたものと思われる文章が付けられている。

とりわけ浦上天主堂の廃墟で執り行われた「ザビエル祭」の写真には、「神の國は目にはみえない形ある教會堂は、崩れる。しかし、その崩れたことが、大きな刺激となつて、神の國はいよいよ大きく榮えるであろう」という文章が付けられている（永井 1949: 12）。ここで永井は、人造物である「教會」の建物、すなわち「歴史」を、「神の國」、すなわち「永遠」と対照させ、カトリック信徒たる永井は後者を選ぶと宣言しているのである。

旧浦上天主堂の廃墟に関する永井の言葉はよく知られる永井の「思想」を思い起こさせる。永井は、原爆によって浦上の8,500人超の信徒が犠牲になったことを神の「摂理」と呼び、これらの命は世界平和のための犠牲となったと語った。哲学者の高橋眞司はこの「思想」を「浦上燔祭説」と名付けた（高橋 1994）。この「思想」をめぐる現在に至るまで教会内外で議論が続いている（片岡 1996、山内 2017）<sup>55</sup>。

旧浦上天主堂の廃墟に関する山口の「決断」を、こうした「思想」ではなく、山口の「祈り」の文脈で理解するとき、旧浦上天主堂廃墟保存問題はまさに「歴史」と「永遠」の緊張関係の真っ只中に立ち現れる。カトリックの司祭であり司教であった山口の「決断」は、「世俗なるもの」と「永遠なるもの」の緊張関係の中で、下された。ここで重要なことは山口の「決断」の背景にあるのは、永井が小冊子で言ったような、教會の建物は人が作ったものであり、重要なものは目に見えない「神の國」であり、「永遠」の世界であるというある意味でわかりやすい「思想」ではない。山口の「決断」には、「歴史」と「永遠」の緊張関係を引き受けて、その真っ只中で悩み、祈り、そしていったん決断したらその責任を引き受けて躊躇せずに行動する司教の姿がある。

旧浦上天主堂遺構をめぐる山口の発言はさまざまに揺れた。ローマでは古い教會の一部を新しい建物に「はめこむ」こともあると紹介する一方で<sup>56</sup>、「憎悪をかきたてるだけのああいふ建物は一日も早く取りこわした方がいい」とも言い<sup>57</sup>、また、前述したように浦上の信徒にとって「聖地」であるあの場所以外に新しい天主堂を建てる場所はあり得ないとも考えていたとされる。さらに、「世論に流されては、着工の時期を失してしまうおそれを感じられた」（中島 1990, 218）と伝えられるように「世論」の影響も心配していたようだ。

しかし、これらはいずれも、原爆という暴力の歴史、そして浦上キリシタンの歴史に関する議論も含めて、「世俗的な」論理の表れである。山口の頭の中にはさまざまな世俗の論理が錯綜していた。そしていろいろな選択肢がある中で神に祈りながら、「世俗なるもの」、そして「歴史」を、それらを超越する「永遠」に対峙させ、その緊張関係に再び身を置いて、「決断」の時を待ったのではないだろうか。

最終的に山口は多くの市民が望んだ結論とは異なる決断をした。この決断が神の「御心」、「永遠」の論理と一致するものであったのかどうか誰にもわからない。フローレスでの決断とは異なり、歴史の証人たる旧浦上天主堂廃墟を取り壊した山口の決断については現在まで賛否が分かれる。重要な点は、戦

<sup>55</sup> 永井の「思想」の長崎のカトリック教界における歴史的な位置付けとその変化については四條（2015）を参照。

<sup>56</sup> 「浦上天主堂存廢是か非か——各界代表はこう答う」、『長崎日日新聞』、1951年9月1日。

<sup>57</sup> 「消える爪あと——浦上天主堂撤去の真相」、『週刊新潮』、1958年5月19日号、pp. 29。

中のフローレスでも、戦後の長崎においても山口は、「歴史」の論理と「永遠」の論理の緊張関係の中で時間をかけて考え、悩み、祈った末に「決断」したという事である。

山口の「決断」には、永井の「思想」のような明快さ、わかりやすさ、そして「神の國はいよいよ大きく榮えるであろう」というような「樂觀」はない<sup>58</sup>。それは山口の「決断」が「歴史」と「永遠」という相反する論理の相剋を引き受ける「決断」であったからである。司祭であり、司教である山口にとって、「歴史」と「永遠」とは、「歴史」の中であってそのうちの一つを選択できるようなものではなく、それらが「歴史」の中で一致することもないのである。そうした一致があるとすれば、それはおそらく「祈り」の中においてのみであり、そうした「祈り」の末に、すなわち「祈り」の中の「一致」の先に行き着いた「歴史」の中の「決断」は、「歴史」の中にありながら「歴史」と「永遠」の緊張関係にとどまるという意味の発現に他ならない。浦上天主堂廃墟保存問題に関する山口の「決断」はまさにその緊張関係の中で下され、同時にその緊張関係の存在を想起させる。この意味で再建された天主堂は名実ともに「歴史」と「永遠」を繋ぐ「祈りの家」なのである。

#### 〔謝辞〕

カトリック長崎司教・大司教を務めた山口愛次郎に関する調査に関しては、カトリック長崎大司教区の高見三明大司教（当時）、同司教区広報委員会の山田良秋神父と鹿山みどりさん、純心聖母会のシスター濱田洋子教授のご協力を得ることができた。また浦上教会の久志利津男神父と尾高修一神父、深堀繁美さんにも大変お世話になった。広島市立大学の四條知恵准教授、二十六聖人記念館の宮田和夫さん、南山アーカイブスのオズワルド・カバラル館長、イエズス会日本管区のレンゾ・デ・ルカ管区長、並びに同管区文書館のデイヴィッド・ウェッセルズ神父にも様々な資料を提供していただいた。上智大学キリシタン文庫所蔵の資料については、上智大学外国語学部英語学科の飯島真理子教授、キリシタン文庫の岩崎佳子さん、上智大学大学院の村上瑛海さんの御協力をいただいた。また長崎市議会の資料については、長崎市役所平和推進課と市議会事務局のご協力を得、長崎大学の富永佐登美さんには調査助手としてお手伝いいただいた。長崎大学核兵器廃絶センターの広瀬訓教授と山口響客員研究員のご協力にも感謝したい。

海外に所在する一次資料は、2020年夏以降、オーストラリア国立文書館、シドニー大司教区文書館、聖アウグスチノ修道会ヴィラノヴァの聖トマス管区文書館、サンフランシスコ大司教区文書館の協力を得て遠隔で収集したものである。各文書館のスタッフの方々に深く感謝したい。また、インドネシア、フローレスの神言会エンデ管区の管区長秘書ルフィヌス・レヒング修道士にはフローレスでの資料収集についてご協力いただいた。

2019年から特任教授として所属している広島大学では平和センターの川野徳幸教授と友次晋介准教授、国際平和・共生プログラムの関恒樹教授ら友人たちにいろいろな形の激励をいただいた。また、日本での資料収集に関して、広島大学図書館から様々な支援を受けた。2020年の夏には藤岡香穂里さんに、2021年の夏には大畠奈都子さんに図書館での資料収集のお手伝いをしていただいた。

<sup>58</sup> 山内清海は永井の「原爆＝摂理」論を「希望的未来を開くための樂觀的摂理論」と呼んでいる（山内 2017, 59）。

南山大学の三好千春教授には日本カトリック教会史研究についていろいろと御助言いただいたほか、この論文の草稿にも目を通していただき貴重なコメントをいただいた。

最後に、このプロジェクトはノースウェスタン大学の研究助成を一部受けて実施された。ここに感謝する。

[参照文献]

Arimura, Rie (2014), *La iglesia de San Felipe de Jesús y el Museo de los 26 Mártires en Nagasaki: un legado de México. Hispánica*, 58, 113-143.

Beding, Alex (2012). *Solidaritas benteng iman: Kisah kedatangan seorang uskup, seorang administrator apostolis, dan dua imam dari Jepang, di tengah Perang Pasifik*, Maumere, Flores, Penerbit Ledalero.

Cornelissen, Frans (1949), *Missie-arbeid onder Japanse besetting: Een bijdrage tot de geschiedenis van de Floresmissie*. Steyl-Tegelen, Missiehuis St. Willibrord.

Heyden, J. van der (n.d.), *Kenang-kenangan masa perang*, Alex Beding, trans., Ende.

Leven, Henricus (n.d.), *Misi Flores selama perang Pasifik dan di bawah pemerintahan Jepang*. Alex Beding, trans., Ende.

Steenbrink, Karel (2007), *Catholics in Indonesia, 1808-1942: A Documented History, Volume 2, The Spectacular Growth of a Self Confident Minority, 1903-1942*. Leiden, The Netherlands, Brill.

明石博隆・松浦総三編（1975）、『昭和特高弾圧史 4 宗教人にたいする弾圧 下 一九四二～一九四五年』、太平出版社

青木恵理子（2002）、フローレス島におけるカトリックへの「改宗」と実践、寺田勇文編、『東南アジアのキリスト教』、めこん、259-302

深堀仙右衛門（1943）、民族興隆の精神的基礎（グアム島明石市公會堂に於ける講演より）、『声』、807、25-32

濱田洋子（2017）、『オハラ・レデイ司教の日本視察報告書—1946年7月』本文試訳、『純心人文研究』、23、301-328

原 誠（1995）日本軍政下のインドネシアのカトリック教会——フロレス島を中心に、『キリスト教研究』、57(1)、25-39

平山國三郎編（1949）、『記録と印象』、聖フランシスコ・ザビエル來訪四百年記念観光行事委員會

片岡千鶴子（1996）、「永井隆と『長崎の鐘』——被爆地長崎の再建」『被爆地長崎の再建』、長崎純心大学博物館、53-79

カトリック中央協議会福音宣教研究室編（1999）、『歴史から何を学ぶか——カトリック教会の戦争協力・神社参拝』、新世社

カトリック長崎大司教区編（1977）、『旅する教会——長崎邦人司教区設立50周年史』、長崎大司教区

宮下正昭（1999）、『聖堂の日の丸——奄美カトリック迫害と天皇教』、南方新社

- 三好千春 (2015)、カトリック教会 (日本天主教教団)、『戦時下のキリスト教——宗教団体法をめぐって』、53-85
- 三好千春 (2020)、「カトリック教会と神社参拝問題——『エクス・イルラ・ディエ』対『マクシムム・イルド』」、高山貞美・原敬子編『正義と平和の口づけ——日本カトリック神学の過去・現在・未来』、pp. 109-134、日本キリスト教団出版局
- 三好千春 (2021)、『時の階段を下りながら——近現代日本カトリック教会史序説』、オリエンズ宗教研究所
- 永井 隆 (1949)、『浦上天主堂 The Church of Urakami Nagasaki, Japan』、浦上天主堂
- 中島政利 (1990)、『主の道を歩む人』、聖母の騎士社
- 中町カトリック教会 (1986)、『中町教会献堂90年』、中町カトリック教会
- 南山学園創立75周年記念誌編纂委員会 (2007)、『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007——南山学園創立75周年記念誌』、南山学園
- 根本雅也 (2018)、『ヒロシマ・パラドックス——戦後日本の反核と人道意識』、勉強出版
- 西山俊彦 (2000)、『カトリック教会の戦争責任』、サンパウロ
- 荻原 晃 (1966)、『戦争と宗教——不思議な摂理』、信友社
- 荻原 晃 (1979)、『命拾い』、信友出版
- 坂井 隆 (1980)、フローレス島のカトリックと日本軍政、早稲田大学卒業論文
- 佐藤 隆 (1961)、『花の孤島』、東京信友社
- 四條知恵 (2015)、『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』、未来社
- 志村辰弥 (1991)、『教会秘話——太平洋戦争をめぐって』、聖母の騎士社
- 妙摩光代 (2021)、『愛ひとすじに——シスター江角ヤス伝記』、智書扁
- 田北耕也 (1960)、求道二十年——キリシタンに導かれて、安田貞治編、『神との出会い——21人の回心記』、春秋社、30-59
- 田北耕也 (1968)、天理図書館所蔵の潜伏キリシタン資料を周って、『天理図書館報ビブリア』39: 33-40
- 田口芳五郎 (1932)、『カトリック的國家観』、カトリック中央出版部
- 高木一雄 (1985)、『大正・昭和カトリック教会史 3』、聖母の騎士社
- 高橋眞司 (1994)、『長崎にあって哲学をする——核時代の死と生』、北樹出版
- 高瀬 毅 (2013 [2009])、『ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」』、文藝春秋
- 寺田勇文 (1996)、宗教宣撫政策とキリスト教会 池端雪浦 (編)『日本占領下のフィリピン』、岩波書店、255-290
- 東京12チャンネル報道部編 (1969)、神父と戦争と——南の島フローレスの記録、『証言 私の昭和史 4 太平洋戦争後期』、学藝書林、44-55
- 浦上小教区編 (1983)、『神の家族400年——浦上小教区沿革史』、浦上カトリック教会
- 浦川和三郎 (1920)、『聖マリアの連禱』、[大浦] 天主堂
- 浦川和三郎訳 (1935)、『司祭の日常生活』、カトリック教報社

山口愛次郎（1946）、南方記、『聲』825, 21-25

山梨 淳（2010）、映画『殉教血史 日本二十六聖人』と平山政十：一九三〇年代前半期日本カトリック教会の文化事業、『日本研究』41: 179-217.

山梨 淳（2011）、マニラ万国聖体大会と日本カトリック教会、『キリスト教社会問題研究』60: 69-97.

山内清海（2017）、『永井隆博士の思想を語る』、文芸社

横手一彦（2010）、解説、高原至、横手一彦、ブライアン・バークガフニ『長崎 旧浦上天主堂 1945-1958——失われた被爆遺産』、岩波書店、65-92。